

通用する人材育成を

～社会で活躍する
UWC卒業生



野村吉三郎(司会)
のむら きちさぶろう
UWC日本協会会長
全日本空輸会長



伊関弘明
いせき ひろあき
東京三菱銀行浅草橋支店長
(英国 アトランティック・
カレッジ75年卒)

ケンカもしながら同じメンバードで過ごすことができました。夏休み等は、日本に帰らずヨーロッパから来た寮の友達の家を泊まり歩いたことが昨日のように思い出されます。会社に入ってからも、ポロランドや英国駐在など

野村会長 日本企業では、経済のグローバル化に伴い、国際的な人材が求められるようになっていきます。私もUWCを応援してきたのは、その教育理念に共感しているからです。日本協会ができて三〇年、卒業生も三六〇人を超え、わが国経済界はじめ各界で活躍する人材も、徐々に増えてまいりました。そこで本日は、UWCでの体験が、どのようにその後の生活や社会生活に活かされているか

たか、自己紹介をかねてお話し願います。伊関 私は日本からの二期生として七三年に英国に派遣され、現在は銀行に勤めております。UWCでは四十数カ国の国から来た同年齢の学生が、同じ寮で寝泊まりして勉強したので、国籍を越えて仲間意識が強まり、お互いの意見を理解するようになりました。当時私も含めて国籍の異なる四名が同じ部屋に入られ、二年間、議論に明け暮れ、たまには

UWC(ユナイテッド・ワールド・カレッジ)は、世界各国から選抜された高校生を二年間、全寮制のカレッジで寝食を共にさせることにより国際感覚豊かな人材に育てることを使命とする、英国からはじまった国際的な民間教育機関である。英国、カナダはじめ一〇カ国にカレッジ(高校)が開校されている。日本では、一九七二年に社UWC日本協会が発足、以来、同協会の事務局を経団連(現在は日本経団連)が務め、会員企業六八社と個人一名の協力を得て、奨学生への選考・派遣、奨学金支給等の事業を行っている。UWC卒業生との座談会を通して、世界に通用する人材教育、日本の教育改革について考えてみたい。

世界に 座談会



鈴木智之

すずき ともゆき
商船三井定航部計画グループ
アシスタントマネージャー
(英国 アトランティック・
カレッジ82年卒)



濱本幸也

はまもと ゆきや
外務省大臣官房総務課課長補佐
(イタリア アドリアティック・
カレッジ89年卒)



住田知与

すみだ ともよ
フジテレビジョン事業局事業部
(米国 アメリカン・ウエスト・
カレッジ94年卒)

でUWCでの経験が国際理解、国際交流促進の役に立ちましたし、ビジネスにつながることもありました。

鈴木 私は、八〇年代前半、現在に比べれば海外留学がしにくかった時代に英国に行きました。海外で働きたいと思い、船会社に就職しました。今は海外のさまざまなサービス提供会社とのパートナーシップを構築する交渉窓口業務に携わっています。五〇カ国の考え方の異なる学生と一緒に暮らしたUWCでの経験が、文化や考え方の違う国々の人々とうまくやっていける下地になっています。

濱本 私は、冷戦崩壊直前の八七年にイタリアのトリエステ近郊のアドリアティックカレッジに行きましたが、多くの国の人々と知り合うことができ、大きな資産になっています。外務省に入ってから、UWCで身につけた、異なる考え方や背景の人々に自分の主張を理

解させるといふ柔軟性、適応性が役立っています。また、在外勤務の際、偶然、他の大使館にもUWC卒業生がいて、意気投合したこともありました。UWCでの教育は、時代の一步前を歩いているような気がします。

住田 一〇年前にUWCを知ったことで、私の人生は大きく変わりました。人よりも鹿と熊の数のほうが多いアメリカのニューメキシコ州に行き、考え方、価値観、判断基準など、ほとんど全てにおいて変わりましたし、物怖じしなくなりました。あれほど違う人種・民族の人たちと接して、考え方の違いを壁とは思わずに刺激ととらえることが自然にできるようになりました。また、もともと日本を知った上で、少しでも多くの人と知り合いたいという気持ちが強くなりました。UWCでの二年間は、現在のプロデューサー業に、すごく役立っています。

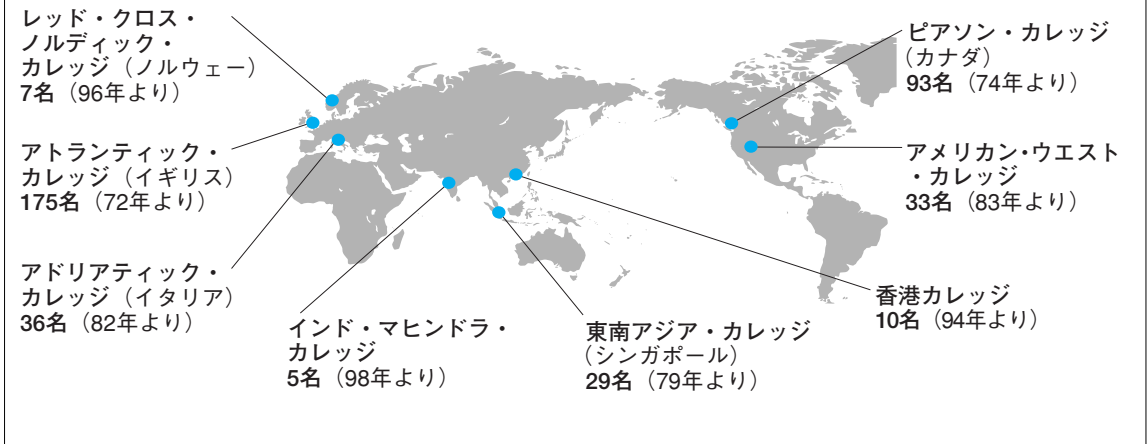
野村会長 UWCでの体験、勉強が相当役立っていることを聞くことができ、応援してきて甲斐がありました。また、そのような体験をされてきた皆さんが羨ましい気持ちもします。日本協会としても、これまで以上にUWCに対する社会の認知度を高める活動をしていきたいと思えます。

UWCの教育理念の実現

野村会長 UWCでは国際理解の促進、ひいては世界平和の実現など、非常に大きな教育理念を掲げていますね。これはどのように実現されているのですか。UWCに行かずに、そのまま日本の高校に通っていたら、どうなっていたでしょうか。

住田 日本の高校に進学したとしたら、安穩としたそれなりに楽しい生活を送っていたと思います。UWCでは、自分と同じ年の生徒

UWC日本協会の派遣実績



が皆ここまでハングリーで前へ進もうとする姿勢を持つていることに打ちのめされました。あれほどの刺激は日本では経験できません。また、とにかく考えさせるといふ教育で、自分で調べて考えをまとめ、論拠を示して、先生や他の生徒と討論することが中心でした。

濱本 歴史の授業の冒頭、先生が「私の役割は、どう考えるかを教えることだ」と言ったことが、記憶に残っています。全く違う立場の書物を何冊も読ませて、あなたはどうか考えるか、と聞かれる。今世の中に起こっていることをどうみるかという目をかなり鍛えられました。これは、少数のクラスでないといけないことです。

鈴木 日本の学校に残っていたら、興味の対象が限定的になって、さまざまなきが身につくのもかなり遅くなっていたかもしれない。まだ頭が固まらない一〇代後半でというタイミングがよかったと思います。さらに、UWCには世界中から生徒が来ている。これが他の留学と大きく違う。私が行った当時は冷戦の最中で東側の人たちがいなかったのが残念ですが、一人一人考え方が違うのが当たり前、答えは色々あるというのを思い知らされました。

伊関 日本の高校教育は受け身ですが、UWCでは自分は将来何をやるのか、いきなり考えさせられたことが衝撃的でした。自分で考

えないと一歩も踏み出せない。クラスも少数で、全員の意見がぶつかりあう。世界というのほそういうものだ、と知っただけでも大きな収穫でした。

奉仕活動もカリキュラムの一環

伊関 また、学業以外にも、サービスと言われる課外活動が、カリキュラムに組み込まれています。こちらは日本の学校にはなかった



海難救助訓練(アトランティック・カレッジ)

ので、ついていくのが大変でした。英国校では、ボートやカヌーを使った人命救助、崖壁付近で急な満ち潮で逃げ遅れた人を救助するクリフ・レスキューや、体の不自由な方、お年寄りに対する奉仕活動までが生活に組み込まれており、一口で言えないほど多くの体験をしたと思います。

野村会長 その、サービスというのは、各校共通のプログラムですか。



野村会長(前列右から4人目)と2002年度派遣奨学生

住田 サービス活動、すなわち奉仕活動は、UWCならではのカリキュラムだと思います。アメリカン・ウエスト・カレッジはロッキーマ脈の中腹にキャンパスが位置するという特性上、山岳救助活動が主流でした。州内で遭難者・捜索願が出ると、私たちボランティア隊員も積極的に救助活動に参加しました。夜中の四時まで、積雪三メートルの雪の中、行方不明者を捜索したこともあります。救助活動の一環として米国赤十字社の救急救命士の資格も取得したのですが、帰国後の日常生活においても急な病人やケガ人を助ける上で大

変役に立っています。山岳救助活動以外にも、地域社会と密接にかかわるボランティア活動を数多く経験しました。具体的には恵まれない人々のために住宅建築をしたり、地元の小学校で日本文化を紹介したり、エイズに対する理解を深めることを目的としたイベントのお手伝いをしたりしました。

野村会長 私も、若ければUWCに通いたかった。皆さんをみていると、私も、もう少し人間が大きくなれたかもしれない(笑)。

伊関 UWCは、英国の現地学校という現実感を味わうことはできませんが、理想の教育を追求する国際学校だと思います。国際理解の面で、大変有意義だったと思います。

野村会長 UWCで皆さんは日本を代表したわけですが、日本のことを上手に説明できましたか。

鈴木 二〇年前は、日本といえば自動車と家電しか知られていませんでした。UWCでは、友人の家を訪問することがよくあり、生徒は、にわか親善大使になります。その都度、日本の社会や文化について、自分がいかに知らないか思い知らされました。おかげさまで、海外に行くたび、さらに日本のことを勉強して、日本文化を伝えようという意欲が湧いてきます。

野村会長 日本では、当社をはじめ多くの企業が留学生の受入れや派遣をしています。ま

た日本経団連でも、提言を出して、日本の教育を何とかしたいと頑張っています。

日本の企業社会への注文

野村会長 最後に、日本の人材のグローバル化について、皆さんのご意見を伺いたいと思います。英語の話せる日本人は増えていると思いますが、世界に打って出る人材となるとどうでしょうか。企業に対する注文を含めて、自由にご発言ください。

鈴木 頭で考える国際化と、体験したものは違います。最近の若い人は英語ができますが、きわめて表面的でいいところだけをコピーしています。企業に入って若いうちに異文化に触れ、いろいろな価値観や考え方があることを一二年体験させるべきです。しかも、ある程度、人数を増やすべきです。

野村会長 なぜ早いほうがよいのでしょうか。

鈴木 見栄も恥じらいもありませんから(笑)。

住田 日本人の感覚、日本の考え方、やり方が当たり前というスタンスで仕事に臨むことから、「世界の中の日本」の立場や役割などを考えながら日本の特殊性を意識するということのように発想を変えるだけで、かなり違ってくる。企画を考える時、UWC時代の海外の友人にメールで意見を聞くことがあります。日本人とは全く異なる発想が出てきてバランスを取り戻すことができます。就職してから

も海外の企業や大学に出て行ける制度が手厚くなつてほしいと思います。

伊関 近年、就職してくる若い人は、井の中の蛙の状態で方向性を事前に決めてしまつていて、柔軟性に欠けているように見えます。若いうちから異文化に接することが必要です。そういう経験のある人材を活用できれば、企業にとってのメリットは大きいと思います。
濱本 個人的な意見ですが、人、モノ、カネ、



アメリカン・ウエスト・カレッジ
の女子寮

文化、価値観のボーダーレス化が進むなかで、日本は立ち遅れています。対外関係は、役人や政治家だけでは動かない。民間と協力して、日本全体で取り組む時代になってきたと思います。経済界も、国際的に通用する人材の育成に前向きになってくれれば、ありがたいと思います。

野村会長 教育制度改革とあわせて、日本では、小学校から英語を教えようという動きも

ありますが、どうでしょうか。

濱本 語学を勉強するメリットは二つあります。一つは、コミュニケーションの手段を獲得すること。もう一つは、その言語を使う人々の全く違った発想が反映されることです。
野村会長 日本企業の経営はグローバル化しつつありますが、それとの関係はどうでしょうか。

伊関 日本企業は、今後とも否応なく海外に出ていきます。私が英国駐在時に感銘したことは、ウェールズの片田舎にすら、日本企業が進出し、現地人を雇い、現地生産しているメーカーの日本人幹部の逞しさでした。

学校で学んだ英語にとらわれず、あくまでもコミュニケーションの道具としての英語を積極的に使って、多様な文化にトライし、グローバル化に挑戦していくべきです。

野村会長 最後に、日本の企業社会への期待があればどうぞ。

鈴木 これまで日本企業は、海外に優秀な人材を送って、彼らが頑張つて輸出を成功させてきました。しかし異文化に接するのは、ごく一部の限られた人たちに過ぎません。日本の本社は、旧来のままです。これで世界に伍していけるでしょうか。日本から人を送り出すだけでなく、海外から人材を受け入れるべきです。一人送り出しても国際化するのはい人だけですが、外国の人を一人受け入れれば

多くの人が国際化します。当社の例でも一倍以上の効果がありました。

住田 先人の苦勞を無駄にしないよう、また今後の国際社会において逆境に負けない底力を少しでも多くの日本人が持てるよう、日本企業は「守られている」という意識ではなく、常に競争にさらされているという意識を持ち、国内外において積極的に人材交流・人材育成をしていただければと思います。

野村会長 たしかに、会社発展のためにもグローバル化は避けて通れなくなっています。そのためにも、グローバル化に対応できる人材が、今後ますます必要となつてきます。

本日、皆さんのお話をお聞きして、外国の文化やものの考え方に直に接することができたこと、世界的な観点から日本を考えるようになったこと、そしてUWCでの学習や体験が現在の職場で活かされていること等、大変有意義な点が多いと感じました。

これからは、ますますグローバル化が進みます。そしてUWC卒業生は、それを先進的に担う人材としてますます日本社会から求められるようになっていくと思います。この貴重な制度を維持・拡大できるように、日本協会としても頑張っていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

(十月十八日、経団連会館にて)